



どこから眺めても、圧倒される大きさです

高度な施工力で実現した美しいアーチ型デザイン

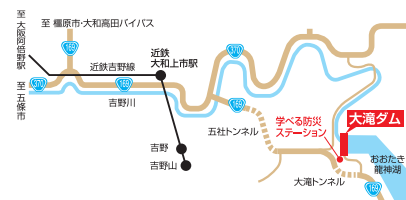
計画から半世紀を経て、大滝ダムが遂に完成

レポーター 清水 幸江さん

「治水」「利水」「発電」で、180万人の暮らしを守る大滝ダムが稼働

昭和34年の伊勢湾台風による紀の川大洪水を契機に

計画・建設が進められていた「大滝ダム」が、さまざまな課題を改善しながら
実施計画調査の着手より50年以上もの長い歳月を経て、ようやく完成しました。
紀の川流域の人々の暮らしを洪水から守るとともに、豊かな水の安定供給と、
水力発電による電力創出を担う特定多目的ダムとして期待されています。
ダム完成から4ヵ月目のダムの様子を、現地からレポートします。



●大滝ダム概要	
場所	奈良県吉野郡川上村地内(紀の川水系紀の川)
目的	洪水調節(紀の川の洪水防御)※奈良県、和歌山県の5市2町 流水の正常な機能の維持 水道用水の供給(奈良県、和歌山県、和歌山市、橈本市:6,49m ³ /秒) 工業用水の供給(和歌山市:0.51m ³ /秒) 発電(関西電力株式会社:10,500kW)
流域面積	258km ²
総貯水容量	84,000,000m ³
計画最大放流量	2,700m ³ /秒
計画高水流量	5,400m ³ /秒
(下流の状況に合わせて放出量を変更)	
有効貯水容量	76,000,000m ³
有効放流量	2,700m ³ /秒
有効高水流量	5,400m ³ /秒

大型台風の洪水被害軽減を目的に建設開始

大滝ダム見学の前に、国土交通省 近畿地方整備局 紀の川ダム統合管理事務所でお話を伺いました。ダム建設は、伊勢湾台風襲来後の翌年、昭和35年4月の調査から具体化。紀伊半島は太平洋に面して台風の影響を受けやすく、南の湿った風の影響で雨が多く洪水が発生しやすい状況にあるといえます。特に昭和28年の台風13号、上流に降雨が集中した昭和34年の伊勢湾台風の被害は甚大だった記録が残っています。そして平成2年の台風19号

でも護岸損傷や内水被害[※]が発生するなど、現地では洪水被害の軽減は長年の最重要テーマだったのです。

※河川に排水できず氾濫した水による被害



伊勢湾台風による被災状況(昭和34年)

■ 渇水対策に欠かせない重要な役割も担う

紀の川流域は平成2年から14年にかけて渇水状態になる年が増え、特に平成6年の夏は最小降雨量の記録を塗り替えるほどの水不足に陥り、洪水対策だけでなく水資源の確保も急務[※]であることが再認識されました。紀の川の用途別水利用は、農業用水79.4%、工業用水10.3%、水道用水約10.1%、その他0.2%で、和歌山県、奈良県の約180万人の暮らしを支えているのです。
生活再建対策の長期化や、完成直前の地すべり等で完成までに長い時間がかかりましたが、地元の方々の理解を得て、景観設計について意見を反映し決定するなど、地域とともに造り上げた先進のダムということが理解できました。

※奈良盆地の平均降水量は全国平均の1/5(2000年統計)近畿地方整備局HPより



平成25年3月23日の竣工式典



50年以上かけて完成した大滝ダム。大変な工事だったことがわかります



カスケード(計画水位維持放流設備)



放流口が見学できるダム内の側壁に、完成までの写真を展示

「学べる防災ステーション」で豪雨体験

大滝ダムの近くにある「学べる防災ステーション」では、大滝ダムの歴史や仕組み、建設工事の過程などが、わかりやすい展示や映像で紹介されていました。地域の子もたちがダム見学の時によく訪れるそうです。大好評だという無料体験の「豪雨体験室」で、私も激しい雨を体験しました!ダムを見て、さらに治水や利水の理解を深められる環境に、自然災害に対する備えの必要性を改めて実感しました。



施設内に入ると、ダムのことが何でもわかる充実の内容

雨ガッパを着て人工的に降らせる豪雨を体験

取材協力: 国土交通省 近畿地方整備局 紀の川ダム統合管理事務所